

小樽観光を考える

観光まちづくりは市民が主役



- ・・・観光まちづくりは市民が主役
-観光都市宣言とわがまち小樽が目指すこと-
- ・・・小樽観光 あなたが主役！
第1回 高野るみさん
第2回 大井厚夫さん
第3回 福島慶介さん
第4回 久末智章さん
第5回 井上晃さん

小樽市産業港湾部観光振興室



小樽観光を考える

観光まちづくりは市民が主役

※この冊子は、平成25年2月から8月に発行した広報おたるの記事に一部加筆・修正を加え、再編集したものです。

- 特 集 広報おたる2月号（平成25年2月1日発行）
- 第1回 広報おたる3月号（平成25年3月1日発行）
- 第2回 広報おたる4月号（平成25年4月1日発行）
- 第3回 広報おたる5月号（平成25年5月1日発行）
- 第4回 広報おたる6月号（平成25年6月1日発行）
- 第5回 広報おたる8月号（平成25年8月1日発行）

発行日／平成26年3月
発行・編集／小樽市産業港湾部観光振興室
〒047-8660 小樽市花園2丁目12番1号
TEL (0134) 32-4111 (内線450)
FAX (0134) 33-7432
E-mail : kanko@city.otaru.lg.jp
ホームページ: <http://www.city.otaru.lg.jp>

小樽觀光都市宣言

～“今こそ”の心意氣～

我がまち「小樽」は、海と山に囲まれた美しい自然、四季が織りなす多彩な風景、そして明治・大正・昭和の面影をしのばせ、かつての栄華を今に伝える運河や歴史的建造物をはじめ、産業・芸術・文化、市民の暮らしに至るまで、多様な観光資源に恵まれた魅力ある都市です。

「小樽」は、まちの将来を巡る運河論争を契機に観光都市として発展し、今や、観光は、まちの基幹産業にまで成長しました。

しかしながら、「小樽観光」が更なる発展を遂げるためには、観光に対する市民意識の向上をはじめ、新たな観光資源の発掘や滞在時間の延長など、いくつかの課題を克服する必要があります。

こうした中、これからのおすすめ観光地に求められること

それは、市民一人一人が観光まちづくりの主役となり、人情味あふれる「小樽気質」でお客様をお迎えし、ふれあいを通じ感動と安らぎを感じていただくとともに、ゆっくりと時間をかけて「小樽」を楽しんでいただくことです。

それが、我が家 「小樽」 にとって、何物にもかえがたい喜びなのです。

今こそ…「小樽」は、多くの人に愛されるまち、より質の高い時間消費型観光のまちを目指し、ここに「観光都市・小樽」を宣言します。

平成20年10月 2 日

小樽観光都市宣言とは

市では、平成18年に初めて観光に関わる事項を取りまとめた「小樽観光都市宣言」とは、さまざまな課題を抱えています。観光入り込み客数は減少傾向が続いているほか、宿泊が少なく滞在時間も短い、いわゆる「通過型観光」が観光客の多数を占めていることなどが挙げられます。

「こき宣言」を策定しました。さらに、20年10月には、まちをあげて観光振興に取り組むことへの意思表示として「観光都市宣言」を行い、「観光都市・小樽」を市内外に広くアピールしていくことをしました。

くは次ページ左上の図み①～⑨を参照）。宣言自体は簡潔な形にまとめる必要があつたため、本文の中には組み込まれませんでした。が、宣言の理念を表すものでした。

この九つの目標のうちの多くは、観光事業者や観光業界、行政が主体となつて、また、それぞれが連携して取り組まなければならぬものです。市としても、景観計画等の制定による良好な都市景

や飲食の関係者だけでなく、市民が自らも観光を通し、まちづくりに関わっていると感じることが必要なではないかと考えたのです。小樽を観光で訪れた方の立場から見れば、そのまちの印象を形成するという点で、市民の誰もが観光関係者となり得るのです。

観の保全(④)やケルース客船の寄港誘致による経済効果拡大(⑥)など、これまでさまざまな取り組みを行つてきました。

そのほか、観光に携わる者、だけでなく、市民が自ら取り組むことのできる目標として「①小樽は、市民がお客様に率先してあいさつすることを目指します」と「②小樽は、タバコやごみのポイ捨てゼロを目指します」の二つが挙げられます。これは、小樽に訪れた

わがまち小樽が観光で目指すこと

この観光都市宣言の素案づくりを進めたのは、「小樽観光プロジェクト推進会議」という会議です。ここでの議論の中で取りまとめられたものの中に『わがまち小樽が観光で目指すこと』という文があります。これは、宣言の作成に当たり基礎となつた考えを九つの目標として整理したものです（詳し

方を温かくもてなし、きれいな景観を提供したいという気持ちを表したものであります。

実際に市内では、毎朝、自宅周辺の道路でごみ拾いをする市民の方や、道路沿いに花いつぱいのランナーを設置し、道行く人々をなごませている町内会や商店街があります。

観光まちづくりは市民が主役

－観光都市宣言とわがまち小樽が目指すこと－



小樽市は、平成18年に観光基本計画を策定し、20年には観光都市宣言を行うなど、観光の振興に努めてきています。しかし、近年は観光入り込み客数も減少傾向にあるなど厳しい状況が続いています。小樽観光の現状と課題、そしてこれから必要とされるものは何なのか考えていきます。

平成15・16年に行われた「観光経済波及効果調査」では、市内の観光に関する売上額が市内総産出額の31・2%を占めるなど、観光の発展は大きな経済効果をもたらしました。また、観光関連産業での雇用が約1万8000人と推計されるなど、市内の雇用にも大きな効果をもたらし、市の基幹産業の一つと言われるまでに成長しました。

このように、順調な成長を続けていた小樽の観光ですが、現在で

小樽と観光

2 小樽観光を考える

小樽観光を考える

また、ボランティア活動を通して、小樽の観光振興に貢献している方もいます。観光に直接関わる例としては、観光客への無料ガイドツアーなどをを行う「小樽おもてなしボランティアの会」や「小樽観光ガイドクラブ」などの団体があります。

「プロジェクト」の活動も話題となっています。

悪い印象を持つてしまうかもしれません。

こんなとき、地元に住む人のほうもほつとするとでしょう。

逆に考えれば、自分が観光客を何なのでしょう。

温かく迎え入れる側の住民では、もちろん少しありません。

例えば、皆さんも旅行などで有名な観光地を訪れたものの、行き

いたお店や観光スポットなどの場所が分からず、ガイドブックを手

に迷ってしまったことはありませんか。

周りの人尋ねてみたいと思つても、誰に声を掛けていいのか分からず無駄に時間を消費してしまつたり、尋ねてはみたものぞんざいな扱いを受けてしまつたりして、そのまち全体に対しても

温かく迎え入れる側の住民では、もちろん少しありません。

小樽観光

あなたが主役！



第1回

大井厚夫



第2回

私は、ヴァイオラを専門に学びたい演奏家が集う「ヴァイオラマスタークラス」を開催する実行委員会の代表を務めています。毎年冬に開催しているこのマスタークラスには、毎回、国内外から30人を超える方々が参加し小樽を訪れます。朝から晩まで音楽漬けの毎日ですが、朝里川温泉の露天風呂や北海道ならではのおいしい食事など、とても満足しているただいでいるようです。参加者の思い出の数々は、参加者のブログなどを通じ広く世界中に伝わっています。

マスタークラスの設立は、「小樽・朝里のまちづくりの会」の協力をいただきながら行つてきました。これをきっかけに私も「まちづくりの会」に参加させていただき、清掃活動や花壇の整備、地域のお祭りなどさまざまな活動に携わってきました。私自身よそのまちに行つて心地良く感じるのは、街並みがきれいだつたり、道がお花で飾られていたりすることなんですね。だから、こういった地道な活動が、外から訪れた皆さんを良い気持ちにさせるんだなということを、まちづくりの活動の中で強く感じました。

最近、地域の活性化に取り組む大学生の皆さんや、小樽に魅力を感じててくれるよう支援を惜しまないまちになつてほしいです。小樽は観光都市でありながら、何かあればまちのあちこちで「お金がない」と言ひ過ぎていると感じます。でも、まちを輝かせるために必要なのはお金だけではありません。とても良いことだし、そんな希望を持つた人たちが小樽に住み続けたまま育てる、いつまでもそんな懐の深いまちであつてほしいですね。

私は、現在、フリーの観光ボランティアガイドをしています。約4年前、「おたる案内人1級」の資格を取得した後にガイドを始め、今では週に4日から5日、年間で200日近く活動しています。ガイドをするときは観光スポットの紹介だけでなく、小樽の歴史を楽しく学べるよう心掛けています。小樽がこれまでの歴史の中で果してきた重要な役割などを説明すると非常に興味があります。ガイドした方たちから感謝の言葉を掛けてもらったり礼状が届いたりすると非常に励みになりますね。

ガイドの際に力を入れているのは、北運河から祝津にかけての紹介です。やはり観光客の方が抱く小樽のイメージは「運河とガラス」が圧倒的で、北運河から総合博物館、祝津へと至るエリアの情報はあまり持っていないません。鉄道好きの方でも総合博物館に貴重な「機関車庫三号」があることを知らない方もおり、このエリアをもつとPRすれば、より多くの方の興味を引けるのではないかと考えています。また、市内の若い世代がもっと小樽の歴史や文化を知ることも大切だと思い、昨年には小学生の課外活動で小樽の観光や歴史についてガイドするといった活動も行いました。

今後もたくさん的人が小樽を訪れてくれるためには、ガイドの数を増やしたり質をより高めていくことが必要ではないでしょうか。実際、「おたる案内人」の資格を持っていても、なかなか都合がつかず現場に出られない方も多いらっしゃいます。そのような方たちが現場に出て行きやすくなれるような環境整備はもちろん、次世代に小樽の良さを引き継いでいくため、私も皆さんと一緒に頑張っていきたいですね。

わがまち小樽が観光で目指すこと

- ①小樽は、市民がお客様に率先してあいさつすることを目指します。
- ②小樽は、タバコやごみのポイ捨てゼロを目指します。
- ③小樽は、悪質な客引きや苦情の根絶を目指します。
- ④小樽は、歴史的な街並みの保全を目指します。
- ⑤小樽は、運河・堺町地区以外にも新たなぎわいの創出を目指します。
- ⑥小樽は、海や港の観光機能の強化を目指します。
- ⑦小樽は、伝統的な文化や技能の伝承を目指します。
- ⑧小樽は、運河・すし・ガラス以外にも新たなイメージの創造を目指します。
- ⑨小樽は、地場産品の市内流通拡大とブランド化を目指します。



小樽運河清掃活動の様子

小樽観光プロジェクト推進会議とは

小樽市観光基本計画に基づき、市と観光協会が中心となって設置された会議で、市長が委員を委嘱しています。

上の文は、同会議で観光都市宣言の理念を表すものとしてまとめられたものです。

今後、小樽の観光が衰退してしまえば、観光関係だけに限らず、多くの事業者が大きな打撃を受け、たくさんの人々が働く場を失うなど深刻な事態となることも考えられます。

本誌では、観光に関するさまざまな分野の方々の声を紹介し、より魅力的な小樽観光について考えていきます。

「ほんの少しの心配り」が変えるまちの印象

こんなとき、地元に住む人のほうもほつとするとでしょう。

観光都市として輝き続けるため

と思うリピーターや、そこから広がる新たな旅行者の増加、小樽での滞在時間延長などにつながつていくはずです。

第3回

福島慶介さん



私は、現在、『株福島工務店』の取締役であると同時にデザインや不動産の利活用を行う『N合同会社』の代表社員として(旧)岡川薬局を拠点に活動しています。私は宿泊業で間接的に観光事業に関わっていますが、小樽の観光について考えた時に、観光業だけを切り出して特別扱いすることに違和感を感じます。観光は本来、その地域の気候や風土、そこで培われた文化など、その場所でしか成立しない要素が最も重要なことです。そこを重視しないと、商業的に作られた観光・まちになり、大事なものが育たないまま「消費」され、大切なものを失ってしまいます。もつとも、観光業を特別扱いしてはいけませんが、観光を発展させることはまちのサービス力向上の良いきっかけになります。私が所属している福島工務店においても、より良いサービスを提供できるよう意識しています。これは観光事業・非観光事業に問わらず大事なことです。

また、これは観光だけに限ったことではありませんが、最近、「自分ひとりが変わつても…」「そんなこと知つたこつちやない」と耳にすることがよくあります。小樽はかつて港町として栄えました。港町とは、本来新しいものを受け入れ、既存の文化と新しい文化をつなぎ合わせる場所だと私は思っています。観光を「自分のこと」と「他人のこと」の中間にある「自分たちのこと」としてみんなが意識を共有することが大切です。そのためには「ようこそ小樽へ」と声をかけるところから始めるのが良いのではないかと思います。もちろん観光業の方々はすでにやっていると思うが、まち全体でこれをすることで、小樽に訪れた方を本当の意味で歓迎でき、自分たちのまちへ誇りを持つきっかけになると思います。

▶小樽生まれの小樽育ち。大學入学を機に上京し、東京大学大学院(建築学専攻)博士課程を単位取得退学。小樽と東京を行き来しながら建築設計や映像制作、グラフィックなどデザイン一般を手掛け、また、それらをプロデュースするディレクターとしても活躍。

第4回

久末智章さん



私は現在、(株)アートクリエイトの代表取締役として大正硝子館などを経営するほか、小樽観光協会副会長を務めています。また、「おたる祝津にしん群来祭り」や「祝津おさかな市」などに携わり、小樽の海や歴史、文化を生かした活動を行ってきました。ここ数年でこれらのイベントを通してたくさんの方々に祝津へ足を運んでいただき、小樽の魚介類の価値に気付いてもらえたのではないかと思っています。

しかし、これ以外にもたくさんある小樽の良い面を広め、小樽が観光都市として発展していくためには、市民一人一人が観光との間接的なつながりを理解し、意識を高めていくことが大切だと思います。極端な例を挙げると、漁業と観光とは直接的には関係がないと思われているかもしれません。一方で、少ないお客様をより温かく迎えればリピーターもついてくるという考え方もあるでしょう。また、交流人口を定住人口にしようと申される中、小樽は家賃も高いし職がないと敬遠されがちですが、人口が増えれば、それに伴つて企業なども進出してくるはずです。そのためには行政と民間が協力し、空いている不動産物件を安く提供することも必要です。小樽の観光都市としての知名度がいつまでも続くとは限りません。皆さんの孫の世代に小樽がこんな良いまちだから住んでもらいたいと思うなら、今すぐ真剣に小樽観光について意識して行動するべきです。観光産業は小樽に残された最後の可能性のある産業だと思っています。

▶小樽生まれの小樽育ち。小樽潮陵高校卒。さまざまな仕事を手掛ける一方で、第1回オタル・サマーフェスティバルの副実行委員長に就任し、歴史的建造物のライトアップなどに携わる。現在、小樽観光協会副会長として多くの活動のために奔走中。

第5回

井上晃さん



私は現在、株式会社の代表取締役として仕事をしており、今年3月まで第2期の「小樽観光推進プロジェクト会議」の委員長も務めていました。難しいのは一言で観光といつても事業者の皆さんそれぞれの立場が違うため、統一感を持って取り組むことが簡単ではありません。

小樽の観光について今までにはいけないと思っていました。これからは、もっと小樽から仕掛けていくべきだと思います。もちろん観光客誘致のため、観光関係者も努力していますが、かつては家の近くに訪れるようになつたのは映画「Love Letter (ラブレター)」が流行したことが大きいです。もっと新しいことに挑戦していくことがあります。もっと大事だと思います。また、これは観光にもつながることですが、近年は人と人のつながりが希薄になつてきていると感じますね。私は工場でものづくりをしていますが、かつては家の近くにある工場で何を作っているのか、窓をのぞけば分かりました。しかし現在は、工場の中をのぞけるような窓はなく、次第に近所の人も工場で何を作っているのか関心がなくなつていきました。これは、近隣住民

同士も同じで、お互いに干渉されることを嫌い、近所に住む人へ関心を失つていきました。このように、近所や他人へ無関心となつてしまつたことから、観光客へも無関心になつていています。これからは、もっと小樽の観光をもっと新しくしていかなければなりません。もちろん観光客誘致のため、観光関係者も努力していますが、例えば韓国の方が小樽を訪れるようになつたのは映画「Love Letter (ラブレター)」が流行したことが大きいです。もっと新しいことに挑戦していくことがあります。もっと大事だと思います。また、これは観光にもつながることですが、近年は人と人のつながりが希薄になつてきていると感じますね。私は工場でものづくりをしていますが、かつては家の近くにある工場で何を作っているのか、窓をのぞけば分かりました。しかし現在は、工場の中をのぞけるような窓はなく、次第に近所の人も工場で何を作っているのか関心がなくなつていきました。これは、近隣住民

へも無関心になつていてはいけないと思います。自分だけのことばかりではなく、周りのことも考えて行動することが大切です。観光まちづくりという言葉がありますが、民間の方にだけのことばかりではなく、周りのことも考へて行動することができます。観光まちづくりは、観光都市として全国的にも知られるようになつた小樽ですが、観光入り込み客数は、減少傾向が続いているなど、さまざまな課題を抱えています。

そこで、小樽観光をもつと魅力的なものにしようと、さまざまな分野の方から小樽観光についてご意見や課題などを伺つてきました。

その中で多くの方から口を揃えて出てきた言葉は、観光は一部の観光事業者だけの問題ではなく、市民一人一人と関わりがあることを意識してほしいということでした。

皆さんのが旅行に行つた際、初めて訪れるまちで温かい言葉をかけてもらつたらとても良い印象を受けることがあるのではないかと感じました。

このほか、市には職員を他都市や民間などに派遣するなど、広い視野を持つた人材の育成に力を入れてほしいと思います。こうして育つた人材は、まちの財産となり、個性あるまちづくりへつながっていくのではないでしょうか。



小樽運河散策路

観光都市として全国的にも知られるようになつた小樽ですが、観光入り込み客数は、減少傾向が続いているなど、さまざまな課題を抱えています。

そこで、小樽観光をもつと魅力的なものにしようと、さまざまな分野の方から小樽観光についてご意見や課題などを伺つてきました。

その中で多くの方から口を揃えて出てきた言葉は、観光は一部の観光事業者だけの問題ではなく、市民一人一人と関わりがあることを意識してほしいということでした。

皆さんのが旅行に行つた際、初めて訪れるまちで温かい言葉をかけてもらつたらとても良い印象を受けることがあるのではないかと感じました。

このほか、市には職員を他都市や民間などに派遣するなど、広い視野を持つた人材の育成に力を入れてほしいと思います。こうして育つた人材は、まちの財産となり、個性あるまちづくりへつながっていくのではないでしょうか。